

戦後イラクの政治ブロック形成における

社会的紐帯意識の役割

酒井 啓子

※本稿は、2009年6月25日に行われた「近代化と民主主義」研究会（東洋哲学研究所主催）での報告に基づき、加筆していただいたものです。

はじめに

私の専門は中東の現代政治、とくにイラクの現代政治になります。イラク戦争後のイラクの政治動静をどのように見るかという点で、しばしば通説で指摘されるイラク政治における宗派や部族、あるいはエスニック要素といった、いわゆる「伝統的な社会紐帯の政治に

おける役割」が、現在の政治にどのような役割を果たしているか、まとめてみようと思います。

イラクでは、2005年以降、複数政党制に基づく選挙制度をとっておりまして、現在2度の選挙を経て、来年（2010年）には2回目の正式選挙を実施するといふ流れになっています。そこでどのような政党がどのような形で多数派を構成するのかということが、イラク国内で議論になっておりますので、そういう動静を振り返ってみることにしたいと思います。

イラクの政治、とくに戦後のイラク政治において、

しばしば「宗派的な偏向性」あるいは「宗派に基づく政治運営」というようなことが強くいわれるわけなのですけれども、それがはたして適切であるかどうか。このことを、今日の発表の中心的な課題として議論してみたいと思います。

イラク政治の動態を分析する上で、シーア派という宗派、宗教的な要素をどういうふうにとらえるかというのは非常に大きな問題でありまして、宗派集団といった場合に、それをコミユナルな形での地域の信徒共同体として、儀礼や儀式などに基づいて集まる、ローカルな社会集団^①というふうにとらえるのか、宗教的な教義、あるいはそれをベースにしたイデオロギーを掲げた、いわゆる政治思想としてのイスラーム主義の集団^②としてとらえるのかということで、まったく異なる行動様式を見てとることができません。これをどういうふうに分けるかというものは中東研究者の間でも議論が分かれており、宗派といったことを一概に定義するのは難しいわけなのですけれども、今回はその辺は省略して、現在のイラク政治におけるシーア派の優位とい

う、宗派に基づく政治の運営のありかたについて検証を進めていきたいと思っています。

I 戦後のイラク政治における「シーア派優位」との通説

シーア派と簡単に申し上げましたが、ここでイラクの人口構成を見ておきます。

イラクでは民族分類で申し上げますと、大体7割から8割方が「アラブ民族」です。アラブ民族の定義は、アラビア語を話し、文化的・歴史的にアラブ社会の中で生きてきた者ということになりますが、アラビア語を話す言語集団としてのアラブ民族というのが、イラクの7割から8割くらいといわれております。残る2割半くらいのうちの2割弱が「クルド民族」。これはクルド語を話す山岳地域に住むクルド人という少数民族です。あと残りが5%前後として、そこにはアッシリア人と呼ばれる、古代アッシリア帝国の末裔と称する「アッシリア民族」などキリスト教徒の少数民族が若干います。さらに「トルコマン民族」。これはトルコ系民

族で、いわゆるトルクメニスタンのトルクメンとは別になりますが、トルコ系のトルクマン語という、かつてのオスマン語に近い言語を話す人びとが5%くらいあります。

民族的には以上のような構成なのですけれども、アラブ民族は大体2対1くらいの割合で、宗派的にシリア派とスンナ派に分かれます。イラクの宗教は、先ほど申し上げたキリスト教であるアッシリア民族の5%を除いて、9割半がイスラーム教徒であるといわれております。そのうちの大体5割から6割くらいがシリア派で、残りがスンナ派という区分になっております。

宗教と民族とは決して同一、同列に考えられるべきものではないのですけれども、一般的にはアラブのシリア派、アラブのスンナ派、そしてクルドという、レベルの違う分類を一緒くたにした妙な分類がなされております。ご紹介するのは、よく提示される地図ですけれども、このように宗派分類と民族分類をまぜこぜにした形で地理的な分布が示されることが多いのです。ちなみに、バグダードやバスラといった大都市に関し

ては、容易に想像がつくように、ありとあらゆるエスニック・グループと宗派集団が、移民・移住の結果、混在しているというのが現状です。

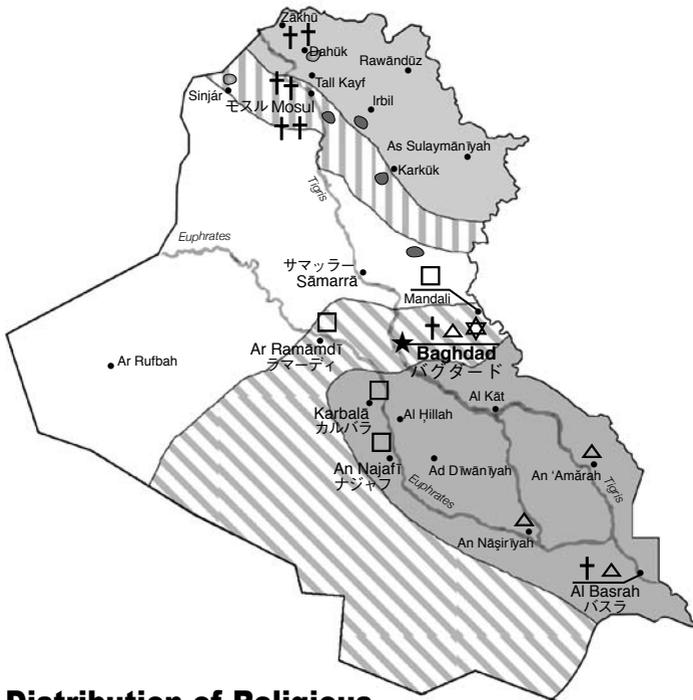
ただし、人口統計に関しては、宗派を調べた人口統計というのは1947年が最後でして、それ以降は、人口統計はやっていても、宗派を問う調査は行わず、数字として残っておりません。人口増加率を想定して現人口を推定しているものがほとんどですので、しばしばメディアに登場するイラクの宗派比率というのは、信用しないにこしたことはない、というのが私の見方です。

— そのようなことを前提として、イラク戦争後のイラク政治においては、シリア派が圧倒的に優位に立っているという通説を検証してみたいと思います。

2003年以降の閣僚の宗派別分類をざっと見たかぎりでも、閣僚の多くがシリア派に分配されているというのが見てとれます。ただ、人口比率に沿っているといえ、たしかに比率に沿う形がとられています。時間がたつにつれ、スンナ派の方が人口比率に比べて

多くなつていく傾向もありますが――。いずれにして
も、首相なり副大統領なりといった政府要職に占める
シーア派の位置づけが大きい。このように、シーア派

優位であると思われるような政権構造になつているとい
うことは確かです。
そしてシーア派優位を支えるものとして、過去の選



Distribution of Religious and Ethnic Groups

- | MAJORITY GROUPS | MINORITY GROUPS |
|---------------------------|------------------------|
| Sunni Arab (北西部) | Yezidi (最北部2カ所の飛び地) |
| Sunni Kurd (北東部) | Turkoman (その南の4カ所の飛び地) |
| Shia Arab (南東部) | Iranian |
| Sunni Arab and Sunni Kurd | Christian |
| Sunni Arab and Shia Arab | Mandaean |
| | Jewish |

Christians represent different sects and ethnic groups. 【キリスト教徒は、異なる宗派と民族をまとめてある】

Yezidis, Mandaeans, and Jews, although shown as religious groups, may also be considered as separate ethnic entities. 【ヤジーディー教徒、マンダイ教徒、ユダヤ教徒は宗教グループとして示してあるが、単独の民族集団とも見なされている】

0 200 Kilometers
0 200 Statute miles

イラクの「宗教・民族集団地図」

Iraq - Distribution of Religious Groups and Ethnic Groups (1978/
カラー)をもとに作成

挙結果があります。戦後のイラクでは2005年の1月と12月に2度選挙を行っております。1回目の選挙が制憲議会選挙で、2回目が憲法の制定に基づく正式な議会選挙、任期4年ということになっていきます。

このうち、2005年12月の議会選挙の選挙結果をみれば、UIA（イラク統一同盟）という政党連合が半数弱の議席をとっております（275議席中、128議席）。UIAは1月の制憲議会選挙では、半数を超えた数字になっておりました（275議席中、140議席）。この圧倒的優位になったUIAが、どういう選挙ブロックであるかを見れば、UIAを構成する政党のほとんどが、シリア派を主たる構成員としています。ですから、選挙によってシリア派を中心とした政党連合が勝利し、与党が政権の要職を占めている。よって現在のイラクの政権はシリア派を中心とする政権運営になっている、という論理で、イラク政治が説明されるわけです。

そこで、このUIA、イラク統一同盟という組織が問題になるわけですが、この組織はメディアでは必ず「シリア派の」という形容詞をつけて報じられます。実

イラク統一同盟の主要構成(2005.1月 制憲議会選挙、05.12月 正式選挙)

構成政党	政策	基盤	議席
ダアワ党	イスラーム主義、中央集権	国内基盤+海外支部、平信徒	30
ISCI（イラク・イスラーム最高評議会）	イスラーム主義、地方分権	海外支部(イラン)+宗教指導者	30
サドル派	イスラーム主義、中央集権	国内基盤、貧困層	30
ファディーラ党	イスラーム主義	国内基盤	15
イラク国民会議(05.01)	親米、世俗主義	亡命者中心	—

際のところ、構成政党を見るかぎりでは、シーア派を構成要員とする組織がほとんどです。アラブ民族の政党に限ったものではなく、統一同盟の中には他の民族のシーア派、たとえばトルコ系のトルコマン民族のシーア派組織も入っています。

「特定宗派のための政党」の歴史はない

いずれにしても、どの政党もシーア派を中心としているわけですが、はたしてこれを、シーア派によるシーア派のための選挙ブロックであるとみなしてよいのかどうか。それは当たり前のようにいわれているわけですが、私も、私などは、非常に強い違和感をもつわけです。その違和感はどこから来るかという点、過去のイラク現代史において、シーア派にしてもスンナ派にしても、宗派を軸にした、ある特定の宗派による、ある特定の宗派団体のための政党というようなものが形成された例はないからです。シーア派の利益のためのシーア派による政党形成というようなのは、これまででなされたことはありません。特定の宗派のためと

いう政策目標を掲げずに、たまたまシーア派の構成要員が多いというような偏向が見られるケースはいくつかあります。しかし、構成員の要件にシーア派であることと規定したり、シーア派の住む地域のみの利害を考えるようなたぐいの政党というのは、史上ありません。

若干の例外として1920年代の後半にナフダ党という政党ができて、これは短命だったのですが、政権が閣僚などの要職ポストを配分する際に、シーア派の登用比率を上げよというような要求をしたことがあります。これが唯一、シーア派によるシーア派のための政党という位置づけになるかと思えます。

その後も、特定の宗派のための政党というものは存在していませんが、唯一、最近現れたのは、イラク戦争の始まる9ヵ月前、イギリスに亡命していたシーア派の政治家たちが中心となって、*Declaration of the Shia of Iraq* 「イラク・シーア派宣言」というのを2002年6月に出しております。この宣言は注目を浴びましたが、それは、シーア派の人たちがシーア派のため

に何らかの形で要求をするということをも初めて行った
ということ注目された、そういう事実があります。
ただ、いかんせん、在外の亡命政治家による宣言であ
ったために、そういう在外のシリア派コミュニティの
意向が、はたして、イラク国内のコミュニティの
意向に沿うものかどうか、強い疑義が出されたも
のでした。調べてみれば、外にいる亡命政治家たちの、
イラク戦争が終わった後のポスト要求のための準備的
なものであるという程度の見方しかされておりません
でした。

イラク・シリア派の主流は

静謐主義（政治不介入）

このように、過去において、宗派に基づく政党結成
というのとはなかつたわけです。にもかかわらず、イラ
ク統一同盟というシリア派の政党ブロックが成立した
のは、なぜか。この疑問に対しては、以下のような説
明がしばしばなされます。

①シリア派はイスラーム主義が強く、政党化しやす

い、②シリア派は宗派的凝集力が強い、③シスターニ
ー師（シリア派宗教界最高権威）の統率力、④シリア派がフ
セイン政権期に抑圧されていた、⑤米の政策によって
宗派ごとの政治代表制が導入された。

こういう5つの説明によって、イラク統一同盟がシ
リア派ブロックとして成立するのは何ら不思議ではな
いという説明がなされているのですが、私の抱く違和
感はそんなに簡単に解消されるものでは決してありま
せん。ここで、これらの説明に対して、ひとつひとつ
反証したいと思います。

まず①について。最初によくいわれるのは、今のイ
ラン情勢をみても容易に想像されてしまうわけですけ
れども、シリア派というのはそもそも政治化しやすい
宗派であるというような、本質主義的な議論がありま
す。しかし、シリア派がイスラーム主義という政治イ
デオロギーの強い宗派であるという認識が広まったひ
とつの原因は、やはりホメイニによるイランのイスラ
ーム革命が1979年に成就したことによるイメージ
が強く定着しているのだらうと思います。

シーア派の宗教界の間でなされている「宗教界としてどのように政治にかかわるべきなのか」という議論について、2つの学説が歴史的にありまして、ひとつは宗教指導者こそが政治も含めて指導していかなければならないという《積極主義》の学派。それから、いやむしろ宗教指導者は、イスラーム法学を扱うものですから、いわゆる近代国家における日常生活がイスラーム法と矛盾していないかということだけをきちんとチェックしていればいいのであって、政治そのものに口を出すということは行き過ぎであるということで、《静謐主義》を主張する学派。この2つがあります。

ちなみにホメイニのイスラーム革命論は、前者をさらに押し進めた形で、イスラームの宗教指導者自身が直接政治にかかわっていくことを主張したものであり、そうした議論を展開したのは彼が初めてといってもよいものです。つまり、ホメイニ理論は一般的なシーア派の議論であるわけでは決してなくて、他の宗教指導者や政党の中には賛同するものがありますが、全体のシーア派社会のなかでは必ずしも主流ではありません。

むしろイラクでは、主流は《静謐主義》であって、いわゆるイスラーム法と近代法の矛盾を解消すべきだということだけではこだわりませんが、それ以外の具体的な政治政策については口を出さない。そういう《静謐主義》が、基本的にはイラクで圧倒的に主流であったということ です。

イラク統一同盟の主要構成要員である「ダアワ党」などは、50年代に結成されたときには、宗教界、宗教指導者、あるいは神学生たちは、この政党に入ることが禁止されておりました。これは「宗教界は政治にタッチすべきではない」という強い伝統があつて、ダアワ党の創立者であるバーキル・サドルという宗教指導者自身も、自分が作った後に離党しています。そこは非常に徹底している。

ですから、シーア派は政党化しやすいというのは、今申し上げた経緯からすると、逆である。むしろ政治化に対して慎重であり、センシティブであるというふうにいえます。また、イスラーム主義政党はスンナ派にもあるわけです。

宗派性より部族的紐帯のほうが強い

次に②の説明ですが、これもまたイランでのイメージが強いのですけれども、「シーア派はいろいろな形で宗派的な凝集力が強い」と考えるものです。とくにアーシュラーとかアルバインとか、そのほか、宗派コミュニティーの一体感を強めるさまざまな儀式・儀礼が多々、シーア派にあります。アーシュラーというのは、イマーム・フセイン（ムハンマドの孫）の殉教に対して喪に服す行事で、アルバインというのは「40日」という意味で、イマーム・フセインの殉教から40日目日に百万もの人たちが聖廟に集まって大行進します。それが政治化すると暴動になり、クーデターなどを準備するということなのですが、これまでも多々あるということ、そういった儀礼をもっていることは政治化しやすい要素であるといわれます。

たしかにイランでは、こうした事例は多々見られ、イラン革命の過程などでそういった行事・儀礼が、政治化するのに大きな役割を果たしてきたわけですから

ども、イラクに関していえば、必ずしもそういう行事が頻繁に行われていたわけではありません。フセイン政権時代にそういうものが禁止されていた、あるいは自制されてきたということもあるわけですけれども、主だったイラク近代史の著者の多くが、イラク社会においては、宗派性よりもむしろ部族的な紐帯意識のほうが強かった」と指摘しております。その背景として、シーア派に改宗するのが18世紀くらいであり、イランなどに比べて非常に歴史が浅かった、大昔からのシーア派としての歴史、伝統が地域的に限られていたということも指摘されております。

また、③の点、イラクにおいてはシスターニという宗教権威が強い統率力をもっていて、彼の鶴の一声で、こういう政治プロックが形成されていったという側面を強調する、宗教界の力というものを強調する議論があります。

しかし、イラクの宗教界は基本的に《静謐主義》をとってきたわけで、その《静謐主義》の最たるものがこのシスターニの学派であり、彼は基本的に政治には口を

出さないというスタンスをとっているのです。その意味で、政治不介入という彼のスタンスは、イラク統一同盟に加盟しているいずれの政党とも、実は真つ向から反するスタンスになります。

さらに、④の点、これも新聞などでよくある議論なのですけれども、シーア派が今、台頭してきているのは、前のフセイン政権の時代に抑圧されていたので、その反動として今、力が強くなっているのだという点です。

しかし、細かいことを捨象して言えば、フセイン時代の政権構造が、スンナ派の支配と同義であったという議論自体が間違っています。フセイン政権というのは特定の宗派の政権であったわけではなくて、さまざまに巧妙な手段を使って、宗派や民族を横断して支配の網を張りめぐらせていた。シーア派の登用も多々ありました。また、抑圧されていたという意味では、他にも集団的に徹底的に抑圧を受けていた勢力はあるわけです。そういうことを考えれば、必ずしも前政権に抑圧されていたということだけがバネで、シーア派が集団的に政治化を強めたわけではないといえます。

次に、⑤のアメリカの占領が宗派対立を生んだという議論です。宗派ごとに政治的な代表制を確保するというやり方は、イラク戦争が終わった直後にアメリカが導入し、宗派別の配分によって閣僚を決めたりしています。そういった点で、かつてはそれほど政治意識の強くなかったシーア派の間に、宗派代表制を強く意識させるシステムが導入され、それによって今のイラク統一同盟ができあがってきたのではないか。こういう議論があるわけです。しかし、イラク統一同盟の自発的な発生過程を見ているかぎりでは、そうした影響はそれほどないといえます。

以上のようなことを考えれば、シーア派だから、当然のごとく政治ブロックを組んで権力を確保する、というようなことは、必ずしも簡単に言えないと思います。

「宗派ブロックが政策対立で分裂」は本当か

イラク統一同盟はシーア派の政治ブロックであるとか、シーア派がイラクの戦後の政治で主流を占めてい

るといような一般的な理解に対して、実はよく見ると、宗派依存の政治ブロックというのは実際にはそれほど固定的ではないし、堅固なものではありません。

イラク統一同盟というのは、選挙の前の2004年10月頃に成立し、2005年1月の制憲議会選挙で名乗りを上げて、それ以降、与党としてずっと機能してきました。そして、2005年12月の正式議会選挙で勝利し、2006年5月に現在のマリーキー政権が成立したわけですが、実際のところは2007年1月、つまりイラク統一同盟という政党ブロックが成立してから2年半ほどたったところで、すでに宗派内での分裂の状況が深刻になりました。2007年1月には、統一同盟の3分の1ほどの勢力を占めるサドル派という勢力が閣僚から脱退し、その後、このサドル派と、同じ統一同盟のメンバーであるイラク・イスラーム最高評議会（ISCI）の間で直接の武力衝突が起きます。

このように、イラク統一同盟の中の主要な構成メンバーが対立し合うという状況が、2007年の春ぐら

いから顕著になってきます。そして2008年の夏から秋にかけては、現在の首相を輩出しているダアワ党、これは統一同盟の主導権をとっている党ですが、そのダアワ党とイラク・イスラーム最高評議会との対立が生じています。

今年（2009年）の1月には地方議会選挙があったのですが、地方選挙ですから国政選挙のような選挙ブロックは組みません。各政党がそれぞれ候補者を立てたわけですが、この時点で、イラク統一同盟内部の政党間の熾烈な対立が浮き彫りになります。対立の中心は、ダアワ党とイラク・イスラーム最高評議会との対立のわけですが、その争点は非常に政策的なものです。ダアワ党は中央集権、イラク一国の統一、統一的な国家運営というものを主張し、これに対し、イラク・イスラーム最高評議会は、できるかぎり地方分権化させ、地方の強い連邦制を導入するという主張をします。この政策の違い、議論によって分裂が強まっています。

こうした状況に対して、多くのメディアでは、シリア派の政党ブロックが政策によって割れてきた」と、簡

	イラク戦争後の主要な出来事	政党の動向
2004.6	主権委譲、米任命による政権成立、世俗派のアッラーウィが首相に	
2004.8	サドル派、米軍とナジャフで対立	→シスターニー説得でサドル派、シーア派政党と協力関係に
2004.11	米・政府軍、ファッルージャ攻撃	10月ごろ イラク統一同盟成立
2005.1	制憲議会選挙→5. ジャアファリ政権(ダアワ党)成立	サドル派、非公式にイラク統一同盟参加
2005.12	正式議会選挙	サドル派、イラク統一同盟参加 スンナ派各政党選挙参加
2006.5	マーリキー政権(ダアワ党)成立	サドル派、首相人事に貢献
2007.1	米軍増派決定	4月サドル派閣僚辞任
2007.8	米支援「覚醒評議会」(スンナ派部族)奏功	←スンナ派「イラク対話戦線」閣僚辞任 サドル派、政府と停戦合意
2008.夏~秋	政府、クルド自治政府の先行に不快感。政府、部族中心の「支援評議会」各地に設置	サドル派、ISCIと衝突→和解 ダアワ党、ISCIと不協和音
2009.1	地方議会選挙	ダアワ党、ISCIと対立、前者の勝利

単に解釈されます。しかしながら、イラク統一同盟の成立から分裂に至るまでを見ると、このシーア派ブロックというのはたった2年しか生き延びていないわけです。2年の間でも相当、中で対立、衝突があった。

実際には、制憲議会選挙をやって正式選挙で勝ったという段階まで、ほとんど1年間しか有効に機能しなかった。それこそマーリキー政権が成立した時点で、すでにかなり不協和音がみられたので、ほとんど1年間しか、いわゆるシーア派としての連立というのは機能していなかったと見た方がよいのではないかと、私は思っています。

だとすると、1年間だけ宗派に基づいて選挙プロットを作り上げ、その後、分裂していったということをどう解釈すべきなのだろうか。

多数派確保へ「宗派を利用」↓「部族を利用」

もともとダアワ党にしてもイラク・イスラーム最高評議会にしてもサドル派にしても、根幹となる政策である「イスラーム主義」、イスラームに基づく国家建設

という、イデオロギーとしてのイスラームというものを掲げた政党であり、その意味でのイデオロギー集団でした。実際には、個々の政策の方向性は、それぞれかなり異なる政党だったのですが、イスラーム主義を中核にして「イスラーム主義ブロック」としてイラク統一同盟を組んだ。同盟を組むに当たっては、シーア派ということとを前面に掲げるのではなくて、むしろイスラーム主義というイデオロギー集団としてのブロックとして立てたわけです。

しかし同時に、そのイスラーム主義の中での政策的な対立を回避する必要がある。そこで、宗派的な共通性というものを押し立てることによって、政策対立を回避しようとしたのであろう。そのように考えた方が、すんなりいくのではないかと思います。

とすれば、それでもイラク統一同盟が分裂していく過程を、どういうふうに理解できるか。

ダアワ党やイスラーム最高評議会やサドル派の間での政策対立が、シーア派という宗派的な枠組みでも回避できないということになったときに、現在何が起き

ているかということ、宗派ではなくて、むしろ部族的な要因を動員しつつ、連立を維持しようとしている傾向が見られます。つまり、宗派のブロックが自明のものとしてあって、それが政策対立によって分裂していったのではなく、むしろ政策対立を抱えたイスラーム主義というイデオロギー集団が、多数派を確保していくために、最初は宗派を動員する手法をとり、それがだめなら部族を動員する、つまり伝統的な社会的紐帯を補完的な形で使っていた。そう理解すべきだと思います。ですから順番が逆なのです。

宗派という枠でまとめきれなくなった後に、部族の要因を利用し始めている。この傾向は、最近のマリーキー政権の、とくに人事において顕著であるということを見ていきたいと思います。

II マリーキー政権の特徴

マリーキー政権は、2007年から2008年の初めにかけて、連立相手の閣僚が次々にボイコットあるいは辞任していくということで、政権の危機に立たさ

れるような状況にありました。

抜けていった連立の相手というのは、まずイラク対話戦線。これはスンナ派の政党連合でして、マリーキー政権が内閣をつくる際に、イラク統一同盟、つまりシーア派のイスラーム主義の政党だけで構成するとううのは、あまりにもアンバランスであるということ、その時の連立相手として登用されております。ところが、これが2007年8月からボイコットを続けていきます。

もうひとつは、サドル派。これはシーア派でイラク統一同盟のナンバー3の勢力をもつグループですけれども、このサドル派が抜けていきます。

部族色の強い人材登用

このような危機のなか、抜けていったポストにどういう人たちが代用され、どういう人によって埋められているのかを見ると、人事登用にひとつのパターンが見えてきます。スンナ派のイラク対話戦線が抜けた後の補充パターンでは、ひとつに部族色の非常に強い登

用が行われています。

イラクの政治状況を見ますと、戦争後、スンナ派の多い中部から西部にかけて、ユーフラテス川流域の西部とりわけラマーデイのあたりから西のエリアですが、いわゆるスンナ派の武装勢力が一時期、活動拠点にしました。このあたりの部族を、政府は一生懸命取り込もうとします。とくに、マリーキー政権の後期、つまり2007年の夏ぐらいから、その動きが顕著になります。これは新聞などにもよく出ていますけれども、覚醒評議会のような、部族を中心とした反政府勢力を取り込んでいく。まさに、「反政府活動の激しいところの部族を登用する」というやり方です。閣僚ポストに、ゾウバ部族の副首相とか、ドレイミー部族の外務担当国務相などを登用する。これは、武力抵抗運動が最も激しかったファッルージャ（バグダードの約70キロ西、ラマーデイの東）という町の部族的背景をもつ人たちです。反政府活動の激しいところへの配慮としての部族対策という意味があるわけです。

スンナ派だけでなくシーア派やクルド民族の間でも、

部族的なネットワークというのは、イラクの各地に、

いろいろな形で残っているわけですが、このマ
ーリキー政権というのは、部族を取り込んでいく際に、
ファッルージャとかラマーデイというような中西部の
エリアの部族を、とくに強く取り込もうとしている。

それは、ひとつは、反政府活動の非常に強かったと
ころであるということと、特段に力を入れているという
側面があるわけですが、しかしながら一方で、
同じように非常に反政府勢力の強い北の方のモスルと
いう町があり、2006年ぐらいからファッルージャ
以上に激しい武装反乱が起きているといわれて、一
時期、死の町となつたとされています。ここも非常に
部族色の強いエリアですが、しかし、このモスルから
の登用というのではないのです。同じように反政府活動
の激しいところとして、もう少し東にサマッラーとい
うところがあり、そのもう少し西のバクバという町は、
ザルカウイ（イラク・アルカイダの幹部）がかつていたと
ころです。そのようなエリアですが、そこからの部族
も登用されていない。なぜファッルージャのあたりを

中心にテコ入れされているのか。

「両宗派の接点」のエリア出身

このことの意味として、地理的な要因を挙げられる
のではないかと考えています。首都バクダードから近
く、騷擾せうじょうが連鎖されると困るのが、ファッルージャです。

実はマーリキー首相と、その前のイブラヒム・ジャ
アファリ首相、この人もダアワ党の当時の党首で20
05年から2006年にかけて首相を務めたのですが、
この2人はカルバラという町の出身です。この町はシ
ーア派の四大聖地のうちの二大聖地のひとつで、ユー
フラテス川沿いの町でラマーデイの少し南、ナジャフ
の少し北というエリアにあります。シーア派の聖地で
は、ナジャフが一番大きく、宗教界の中心である「ハウ
ザ」と呼ばれる宗教指導者たちのアカデミアの中心なの
ですが、カルバラはそれよりも若干小さいので
たまなのかもしれませんが、ジャアファリ政権そして
マーリキー政権と、カルバラ出身の首相が続いている

わけです。

ここで重要なことは、スンナ派の武装勢力の反政府活動が激しかったときに、ラマーディ、ファッルージャのあたりからシーア派地域に侵入する際、カルバラとかナジャフというのは、ちょうど攻撃のターゲットの前線に当たるわけです。カルバラとラマーディの間で多くの宗派対立が起こっていて、部族同士の衝突もひんばんにある。同時にファッルージャのあたりというのはシーア派の運動とも連動しやすい。つまり宗派的には違うのだけれども「両宗派の接点」にあることで、似たような環境を共有している地域だ、ということが、非常に興味をそそられる点なのです。

要するに、戦後のジャアファリ政権、マリーキー政権は、確かにシーア派のイスラーム主義の政権として成立したかもしれないけれども、人事上の内実をみていくと、宗派間の接点にあり、激しい宗派対立から流血の事態を起こしてきたエリアとして、一種の衝突の前線にある地域の出身者による政権」というような意味あいを強くもっているのではないだろうかと感じてい

るわけです。

このパターンになぜ注目するかといいますと、そこにイラク戦争前のフセイン政権との共通性を見ることができるところです。フセインはティクリート（バグダードの北西120 km）の出身であるということで、ティクリート出身者の独占的な権力掌握ということがしばしば指摘されたわけですが、しかしフセインは同郷の出身者だけに依存するというわけではなくて、その周辺、とくにライバルになりそうな地域の同郷集団とこののをうまく使いながら、そこで連立を組みながら一定のすそ野をもつ支持基盤というものを作り上げてきた。さらにテクノクラートなど政治性の薄い人たちを使いながら政権運営を行い、それは一定程度成功していたという事例があるわけです。

これはかなり強引かもしれませんが、私が興味をもつて今の政権を見ているのは、同じようなパターンがこのカルバラとラマーディのあたりを中心とした地域集団に依るのではないだろうか、ということなのです。まったく同じということにはならないし

でも、少なくともそういったある特定の地域集団とその近隣の地域集団との連立、「地縁集団の連立体制」というようなものを軸に置きながら、政権の基盤を固めていくというような傾向がマリーキー政権にも見えるのではないか。

これはまったくまだ仮説の段階でして、証明できるかどうかわからないのですけれども、宗派に限定した政治プロックを前提にすると見えてこない状況が、別の視点を設定することで見えてくる場合もあるのではないか。そう考えています。

(さかい けいこ／東京外国語大学教授)